麻疹

三善清行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麻疹

【Ｎコード】
Ｎ１８７７Ｃ

【作者名】
三善清行

【あらすじ】
首相の生後６ヶ月の初孫が数日間の発熱のあと、いったん、熱がさがったと思ったら、顔に赤い発疹が現れたのであった。はしかであった。１０日ほど前に、カナダへ修学旅行へ行く、首相の義理の弟の厚労相赤沢の娘祥子を送るための食事会が、あだとなった。

第一章　悲劇の足音

首相官邸は、朝から重苦しい雰囲気に包まれていた。半年前に生まれた、首相の初孫が数日前から高熱を出していた。ほんの2日前に熱がさがって祖父である首相や父親である、九州製鉄社長室長岩崎俊平がほっとしていた矢先、熱が、さがるか、さがらないか、とい　うちに、顔に赤い発疹が現れたのだった。はしかであった。

厚生労働大臣をしている首相の義理の弟にあたる赤沢一郎の一家と先日、私邸で夕食をともにしたことがあった。。カナダへ高校生の長女が修学旅行に行くので、忙しい合間をぬって一緒にご飯を食べたことが、今回の事態を招くことになった。

岩崎俊平の妻、愛子は、ごく普通に1才の時にいつも家族でお世話になっている主治医のところではしかの予防注射を受けていた。ただ、お嬢様学校であったため、周囲で、はしかがはやっているということは、聞いたことがなかったし、友達がはしかで、学校を休んだということも聞いたことがなかった。結婚前に、確か、はしかと風疹の抗体価は、はかったようなおぼえがあるが、何もいわれなかった。赤沢一郎の長女、高校2年生の祥子は、明日から、カナダへ行くのだとはしゃいでいた。もともと、花粉症があり、鼻水をかんでいて、目が少し潤んでいたので、体調はどうなのと聞かれていたが、すこし熱っぽいけど、いつものことだから大丈夫ということだった。

別れ際に、赤ちゃんを抱かせて、と、いつものように愛くるしい笑顔で頼んできたので、愛子は「まさか、祥子ちゃん、あなた、はしかは大丈夫なんでしょうね？」と聞くと、

「まさかね、カナダに修学旅行にいくことができるような高校だから、うちの生徒は、みんな大丈夫よ」

と答えていた。

赤沢一郎の妻、陽子は、少し気がかりだった。じつは、祥子は、1才の時には、はしかの予防注射はしているものの、やはり、お嬢様育ちであったため、周りではしかにかかった子供がいたということを聞いたことがなかったからであった。また、陽子自身は、父である、牛島駐米大使についてアメリカに数年間住んでいたため、現地のルールにより、あらゆる予防注射を済ませていた記憶があったからであった。幼稚園に入るにも、小学校に入るにも、予防接種済み証明書がなければ、受け付けてもらえなかった。そのたびに母親が、ホームドクターに予約を入れ、予防接種をしてもらっていた。一度などあやうく、サマーキャンプにいきそこねるところであった。友達のスーザンが、予防接種の注射はきらいだけど、あれをしないとキャンプにもいけないのよねと何かの拍子にいうのでびっくりして学校に確かめると、「そのとおりですが、なにか」という、いまさら何を聞いてくるのかという感じだったのであわてて、ドクターのところにつれていかれたことがあった。日本に帰ってきてから、予防注射の数が少なく、これでいいんだろうかと思うこともあったが、そのうちに、祥子も大きくなり、病気もしなくなったので忘れていたのであった。

その陽子でも今年の4月ごろから、大学生の間ではしかがはやっているという報道をテレビで見ることが多くなると、やはり、アメリカみたいに2回ワクチンを打ったほうがいいのじゃないかしらと思うようになっていた。そうこうするうちに5月になり、はしかで休講の大学で、全学生にワクチンを費用を大学が負担してうってくれるところがあるということを聞き、厚生労働大臣である夫に、

「ねえ、祥子は、1才のときに、一度だけしかはしかのワクチンをうっていないのだけど、アメリカみたいに2回うたないとだめじゃあないの？」と尋ねると、

「ああ、ＷＨＯもそう言っているし、ほとんどの先進国ではそうなっている。わが国でも国立感染症センターの岡林君をはじめとして、小児科学会のほうからは、何年も前からｊ言ってきている。石

川県の小児科の集まりなんかはそれはもう熱心でなあ。」
「じゃあ、なぜ、しないの。」
「まず、いちども、しない人をなくすのが、先だったのさ。みんな、なかなか、ちゃんとしてくれなくってさ。それと、お金の問題だな、２回目うつのは。ＭＲワクチンというのをうつほうがいいので、ひとり１万円ほどかかる。１学年１００万人以上いるからまあ、１００億はいるなあ。それと、このところ、あまりはしかははやってないいんだよ。」
「国全体のことは、今はおいといていいわ。祥子が一度しかうってないいんだけど。」
「おれは、かかったよ。おれの友達は、ほとんどかかったのじゃあないか。」
「あなたのことは、どうでもいいのよ。祥子よ、祥子。」
「陽子。落ち着いて聞いてくれるか、おれは、今、厚生労働大臣をしている。」
「知っているわよ、医療行政の親玉でしょう。だから、ワクチンの１本や２本ぐらいどうでもなるでしょ。明日、先生に声をかけておいてね。夕方にでも祥子をつれていくわ。」
「だめなんだ。ワクチンが足りないんだ。そんなときに、自分の娘だけ、先にうつわけは、いかない。優先順位があるんだ。うちの省で決めたんだ。それをおれが、破るわけにはいかない。」
「どんな順番なの。」
「まず、第一は、１才になったばかりの赤ちゃんだな。なんといっても一番重症化しやすいからな。予防注射がなかった時代には、はしかだけで１年間に９０００人死亡した年もあるくらいだからな。」
「いつの時代のことよ。明治時代じゃないでしょうね。」
「昭和２６年のことだよ。今年、５６，７才ぐらいの人たちが生まれたころだよ。０才と１才児だけであわせてわかっているだけで６４００人が犠牲になったよ。このほかにも肺炎という病名で届け

られた人もいただろうからもっといただろう。」
「最近は、どうなの。医学が発達したし、みんなも予防注射をしているから死なないじゃないの。」
「それが、そうでもないんだ。平成１０年に大阪で流行したときは、８００人がかかって、９人が死んだんだ。沖縄でも平成１０年から１１年にかけて２０００人ほどかかって、やはり、８人が死んでしまった。ほとんど１才前後の乳幼児だ。毎年、数十人は助けられないよ。」
「予防注射は、どうなってるのよ。みんなしているんじゃないの。」
「もともと、1才を過ぎないとしないのと、みんながちゃんとしてくれるわけじゃあないんだ。副作用は、どんな、予防注射にもすこしはあるんだが、本当の病気になるほうが、はるかに危険なのに、理解してもらえない場合もある。自然にかかったほうがいいという人もいる。これがだめなのは、予防接種がない時代には、はしかだけでも毎年数千人なくなっていたのだから、わかると思うのだが。今、生きている人は、はっきりいって、はしかにかかって生き延びてきた人といってもいいぐらいなのに、どうしてわからないのか不思議だよ。」
「でも、早く見つけて、入院すれば、助かるんじゃないの。」
「麻疹ウイルスに効く薬はないよ。殺す薬を見つけたらノーベル賞じゃないか。今でも世界中で毎年３０００万人がかかって、８０万人が命をおとしているとＷＨＯが報告しているからな。」
「もういいわ。そんなこと。それよりもワクチンよ。赤ちゃんはしかたがないとして、2番目は、だれよ。新型インフルエンザの時みたいに、病院の先生とか、看護士さんとか、警察官、消防士、自衛隊のひとたちとかっていうの。」
「ちがうよ。来年、小学校に入学する6才の子供たちだよ。去年から、やっと麻しんワクチンを2回うつことにしたんだ。でも、これが、みんな、うってくれなくてね。でも、今年からは、ちゃんと

してくれるだろう。それから、いままで、一度もうっていない人ということになるかなあ。ほんとは、このひとたちも急がないといけないのだけど、半分は本人、本人といっても親の責任だから、税金では、だせないよ。」

「あれ、東京都とか、さいたま市なんか、手紙とか、学校でお知らせをもらえるって言ってたのは何。」

「あれは、お金があるところが、勝手にやっていることで、国は知らないよ。」

「それは、ちょっと。ひどいんじゃあない。じゃあ、たとえば、夕張市はどうなんのよ。あそこの子供たちは、自分でお金を出せっていうの。けち！」

「うちからは、頼んでいるんだよ。大蔵省が予算をつけないんだよ。子供には、選挙権はないから、票にはならないから、政治家もあまり、強く要求しないんだ。」

「ばかじゃないの。よくそれで、少子化、少子化っていえるわね。」

「ここで、国会みたいにおれを追及してどうするんだ。それでな、翔子みたいに一度でも1才のときにうっている人は、今のようにワクチンが足りない時は、少し、待っていただけないかということなんだ。」

「でも、大学全体で、うったところもあるんじゃない。」

「まあ、先見の明があったというか、災い転じて福となすというか。早く、はしかにかかった学生が、大学のえらいたちに決断力があったということだろう。もちろん、お金もかかっただろうが、もう心配はない。」

「じゃあ、翔子はどうなるの。ある程度の確率でかかるかもしれない。でも、たいしたことはないだろう。」

「ワクチンを一度しているから？」

「まあ。そうだ。」

「信じていいのね。そうじゃなっかたら、翔子にあやっまてもあ

やまりきれないわよ。いいのね」
「ああ、わかった。」

5月24日、翔子はカナダへと成田から出発した。3クラス、123人、先生が7人だった。翔子は、バンフのホテルに着くやいなや、発熱した。本人は出発前から微熱があったし、旅の疲れだろうと、思っていた。担任の速水先生が、フロントに連絡してくれて、ホテルに勤務している看護士さんが、様子を見てくれることになった。

看護士のハースは、部屋に入ってくるなり、翔子のから首すじに赤い発疹がでているのを見つけた。

「熱は、ありますか、鼻水や、咳とか出てましたか。」
「その、発疹はいつから。」
「麻疹ワクチンは、2回していますよね。」

翔子は、熱については少し前から微熱があった。鼻水や、軽い咳は、花粉症の影響です。と答えていたが、首すじの発疹については、いわれるまで気がつかなかった。

「ワクチンについては、したと思いますが、回数は、わかりません。」と答えた。

ハースはフロントに、
「ドクターに連絡して。このグループは全員部屋から出してはいけません。全員同じフロアでしたっけ。」
「そうです。学校側の希望でしたので、そうしました。」
フロント係は、ドクターに連絡を取りながら、答えた。
「それは、よかった。この子達は、ホテルへ着いてからまだ、どこにもいってないのよね。」
「はあ、そうです。着いたところです。」
「ハースさんどういうことなのでしょう。風邪ぐらいで大げさじゃないでしょうか。」
「担任の先生ですね。よくお聞きください。この生徒さんは、麻

疹の可能性が高いと思われます。だから、これぐらいの注意は必要なのです。」

「麻疹？はしかですか。たしかに、東京では、大学生や、一部の高校生の中では流行していましたけど、うちの高校は、中学校ともどもだれひとり、でていませんたし、みんな、ワクチンは、１回ですけど調査しましたが、うっていましたので、大丈夫だろうと思っていました。」

「非常に、甘いお考えですね。医学的知識のない、先生にこれ以上説明しても無駄だと思いますので、ドクターの到着を待ちましょう。」

「はい、わかりました。」

ドクターは、一目見るなり、カナダ衛生当局の担当のドクター・ハワードに連絡した。

「麻疹と思います。看護士のハースが、手際よく、全員を隔離してくれていましたので、助かります。これから、全員の聞き取り調査と、抗体検査を行いたいと思いますので、スタッフの派遣をお願いします。本人については、様子を見てだめなら、入院をさせましょう。」

ここまで、いつものように日本からの輸入麻疹の扱いに沿って話を進めていた二人に、担任の速水が声をかけた。

「お話中、申し訳ありませんが、是非とも聞いていただきたい、お願いがあるのですが、・・・」

と申し訳なさそうに、言い出した。

「なんですか。この病気については、例外はありませんよ。」とドクターは、すこし、つきはなしたように、電話を手にもったまま、向き直った。

「この生徒なんですが、日本の厚生労働大臣のお嬢さんなのです。その娘さんが、外国で、はしかで、入院となると、お父様の立場が、なんとも、申し訳なくて・・・」

「お国の事情は、わかりますが、それは、公表をふせろというこ

とですか。それは、無理でしょう。すぐさま、このホテル中はおろか、空港、バスターミナルなど、接触の機会があったところに、周知徹底するために、プレスに発表することになっています。ご心配なく、誰が発病したかなど、個人名は、出ませんので。それは、そちらのほうで、おさえられたほうがいいのでは、」

「わかりました。カナダ日本大使館に連絡をとってみます。誰か来てくれるかと思います。」

「じゃあ、こちらは、手順どおり、やっていきます。生徒さんの名簿などを御用意ください。」

バンフのホテルは、衛生局のスタッフが到着すると、あっという間に、聞き取り調査や麻疹抗体のチェックのための採血が終わり、結果が出るまでの間、各グループごと、部屋で待機ということになった。

翔子は、カナダ日本大使館の書記官とともに入院することとなった。生徒たちには、隠すことができないので、ていねいに説明をして、誰が入院をしたか言わないようにお願いをした。みんな、自分が同じ立場にたったことを考え、気持ちよく、納得してくれた。

４日間、抗体検査の結果が出るまで、ある程度、外出も許されたが、ほかのグループとの接触は、禁止された。結局、二人の付き添いの教師と３９人の生徒たちが麻疹抗体価が、低く、感染している可能性があるということで、１０日間ほど飛行機には乗れないことになった。しかたがないので、抗体価が、高かった８９人については、残りの予定を短いながらも、こなし帰国することとなった。最終的に誰も発病せず、二次感染は、なかった。祥子も入院はしたが、特に、治療をするわけでもなく、熱がひいてから3日後に退院し、ホテルで、帰国できずに残ったみんなと帰る日を待っていた。

このことは、日本にも報道されたが、学校関係者には少なからず、衝撃を与えたが、その後、日本に来ていたオレゴン州の米国人の青年が、帰国後に発病するなど、次々と、似たようなことが起こった

ため、大きな話題には、ならなかった。

このとき、まだ、だれも、このあと、起きる悲劇が、静かに小さな赤ん坊の中で進んでいるとは、気がつかなかった。いや、全国各地の小児科医のなかには、以前から、ずっと、悲劇の危険性を指摘していた人々がいた。でも、実際、悲劇が目の前に起こらなければ、世の中は、変わらなかった。

第二章　第一話　発熱

６月２日夕方、九州製鉄社長室長岩崎俊平の長男太郎が、３８度の熱を出した。鼻水や、軽い咳、眼の充血など、風邪症状だった。俊平の妻、愛子は、母親の日東紡績社長の長女である良子に電話をした。

「太郎が、熱を出したんだけど。今からでも先生に診てもらおうかしら。」

良子は、

「明日でもいいとは、思うけど、あなたが、心配なら、先生に来ていただいたら。」

「初めての、熱だし、先生はいつでも、声をかけてくださいとおっしゃってくださってるから、お電話して聞いてみるわ。」

愛子は、やっぱり、すぐに、診てもらうことにした。

一家の主治医の後藤は、午後の診察も終わっていたので、すぐにやってきた。

「風邪という感じですが、今のところは、なんともいえませんね。少し経過をみないと。」

「そうですか。検査とかは、しないのですか？」

「ウイルスの検査ぐらいなら、もってきましたし、あまり痛くありませんから、しておきます。一応インフルエンザの検査もしておきます。」

「え、インフルエンザ！」

「ええ、時々、あるんですよ。ただ、さっき、熱が出たところでは、たとえ、かかっていたとしても、検査をするのが早すぎてうまくでませんので、まだ明日以降も熱が高いようでしたら、他の検査とあわせて再検査をします。」

といいながら、後藤は、細い綿棒でのどの奥のほうをこすって検査をした。

「アデノウイルスも、インフルエンザ、溶連菌もでませんねえ。今日は、これぐらいで、機嫌もそう悪くないようですし、様子をみてください。明日、診療所のほうへ連れてきてください。」
検査結果ををもう一度チェックしながら、後藤は、思い出したように言った。
「奥様は、はしかにかかられましたか。」
「いいえ、ワクチンは、うっているとは、思うんですけどかかっていないと思います。明日までに母に確認しておきます。」
「ええ、お願いします。」
「先生、なぜそんなことをお聞きになるんですか。」
「はしかが、東京都内で流行しているのは、ご存知ですよね。」
「ええ、大学生とか、高校生の間ででしょう。」
「それは、ひとつは乳幼児の間に流行っても、ニュースにならないということもありますし、年齢的には、千葉市などでは、０才児や1才児、それと7，8才というところも決して少なくないのです。」
「え、はしかの可能性が、あるのですか。」
「ええ、まあ、一応、頭の隅には、置いていてください。この後の経過が大事です。それと、ここ2週間ほどの間、大学生とか高校生の親戚に方がこられたとかということはありませんでしたか。」
「ええと、あの、１０日ほど前に赤沢の兄のところの翔子ちゃんがカナダへ行くからっていうので、食事会みたいなことをしました。」
「ああ、あの翔子ちゃんですか、ちょっと待ってください。どこかの学校がカナダではしかで出国できない状態になってましたよ。お聞きになってませんか。」
「はあ、私には、何も、仕事上のことは話しませんので。」
「そうですか。私も、詳しく知っているわけでは、ないのですが、一人だけはしかになったそうです。」
「翔子の学校なら、何か連絡があると思うんですけど。」

「そうでしょうね。」
「まあ、じゃあ、明日、お越しください。お大事に。」
太郎は、すこし、ぐずりつつも寝息をたてていった。

第二話　入院

あくる日の午前中、愛子は、太郎を後藤診療所へ連れて行った。熱は続いていたが、比較的機嫌もよく、このまま、様子をみようとのことであった。愛子は、母に聞いたことを後藤に告げた。

「やはり、はしかには、かかってないそうです。母子手帳が、まだおいてありまして、1才のときに、予防注射はしているそうです。」

「そうですか、それでは、太郎君には、母親からの免疫の移行は、期待薄ですね。」

「え、それは、この子が、はしかにかかりやすいということですか。」

「そうです。まだ、6ヶ月なので、ワクチンはうてないし、母体からの免疫もそろそろなくなってきていますし、それに、おかあさんが、はしかにかかっていらっしゃったなら、もう少し、かかりにくいかとは思うんですが。でも、まあ、そう心配なさらずに、みんなが、みんんな、はしかになるわけでもありませんから。」

「はい、わかりました。また、明日、まいります。」

「お大事に。」

そういいながら、後藤は、少し気になっていた。少し、カタル症状が強すぎるのではないか、川崎病の可能性もでてくるし、3日間発熱が続くようなら、血液検査も必要だろうなあ、と考えていた。

しかし、二日後、診療所の電話が鳴った。愛子からだった。

「先生、熱が少し下がり始めました。朝から、37度少しになっています。」

「それは、よかった。でも、どうですか、体とか、顔に、じんましんみたいな赤いぶつぶつはでていませんんか。」

「ないと、思うんですけど、また、時々、注意してみておきます。今日は、行かなくてもいいでしょうか。」

「そうですね、かわったことがあれば、おいでください。お大事に。」
昼休み、後藤は、区役所で、３才児検診で大勢の母子の対応におわれていた。福祉係りの山本さんが、診療所からの電話を取り次いできた。
「何、緊急の用事？」
「先生、赤沢さんところの太郎君が、じんましんみたいなものが出てきたって、お母さんがさっき電話されてきました。」
「何、やっぱり、そうか。すぐに戻る。すぐにつれてくるように言っておいてくれ。」
あとの相談を、他の先生に頼んで、急いで戻り、待っていた赤沢太郎くんをみるなり、
後藤は、
「お母さん。残念ながら、はしかです。今後、どうなるか、経過をみないとなんともいえませんが、月齢が小さいので、入院をしていただきます。すぐに手配をいたします。よろしいですね。聖基督病院でよろしいですね。」
「はい、お願いします。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1877c/

麻疹

2010年12月10日21時46分発行